

ひまわりからの メッセージ

123号

2021.12.13

NPO ひまわりの花
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人、中野たみ子

病窓より



今日で入院十四日目を迎えました。十一月末の木曜日、二つの研修会が続く中、急に痛みを増した腹痛でしたが耐えられない程の痛みではないとたかをくくっていました。自分の辛抱強さにもそれなりの自信があったのですが、結局は翌日入院。緊急オペということになりました。半日遅かったら大変なことになりと言われた吾が中垂炎も一週間も経てば退院と予測していたのですが、まさかの長期入院となりました。そんなわけで相談や検査予約の延期など多くの方々にご迷惑をおかけすることになり、本当に申し訳なく思っています。どうかお許し下さい。

だが、この入院で学んだこともいくつかありました。一つには緊急の場合の備えということです。主人には物の置き場

所が分かっていますから、口で説明しても探し出すのはなかなか苦勞が要ることだったようです。災害時の備えの大切さは常々言われていることですが、家族全員がわかっていることが必要だと、つくづく思い知らされたことでした。

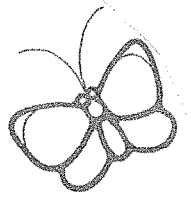
もう一つは新人教育ということですが、私の担当者看護師は新人で、とにかく一生懸命です。自分の責務を頑張るこなそうとする熱意が伝わって来ます。そして、彼女を見守る先輩看護師の助言、指導もなかなかのものです。余分に手を出さず質問されれば応えるけれど極力自分で考えてやっていると見届け、「うん、いいよ」と励まされていられるのです。この先輩後輩のやりとりをながめながら、かつての自分の新人教育を反省させられました。今は、アドバイスもハハラだとしてえられかねない時代ですが、学ぶ側と教える側の信頼関係は、職場全体の雰囲気の中で培われていくものなんでしょう。片田舎の小々な総合病院で、日々ほっこりと温かな心をいただいている気がしました。

人を育てるといふことは、自分も育てられることです。保育や教育の現場でも、親子の関係でも、どこまで介入し、支援するのか、どこまで見守るのか、常に自身が試されていますね。病窓からは養老山系が見え、あの山の途切れた所は木曾三川の合流点でしょうか。薩摩義士のこと、高須藩主の眠る行基寺のことをふと思いました。退院が待たれます。

初心にかえって

「サポートブックを」

捉えなおそう

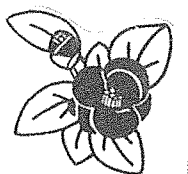


思いもかけず長い休みをいただいたので、少し初心にかえって発達障害支援法ができてからの日々を思い返してみることができました。先日、ある方に「特別支援教育は後退していますよね。」と言われて、コロナ禍によるオンライン授業など教育現場の混乱も大きく、先生方のご負担が大きくなりすぎているのだろうと推察したことでした。

県に発達障害支援センターの設置が義務づけられ、その後、圏域毎に発達障がい児支援センターが法人委託となりました。当時大垣市立ひまわり学園長として、県の委託を受けることになりましたが、当初は、「発達障害って何？」、「支援センター？」と、訪問先の学校や園などでは、けんそうな顔で見られたものでした。でも今は、それなりに存在を知っていたいて、相談や検査、巡回など利用していただけるのは有難いことだと思っております。ただ最近、疑問に思っていることもあります。

困りをもつ子ども達への支援は

比喩が考えていくべきことでは？



発達障がいの子どもたちにとって「途切れない支援」ということが必要であり、大切なことであることは、常々言われてきました。そして、そのためのサポートブックの作成はとも重要なことと考えられてきたのです。ところが最近の風潮として、何故わが子にサポートブックを勧められるのか、理解できていない保護者の方が多くいらっしゃるように思います。「園の先生に勧められたから……」とか「学校で言われたから……」と、何だかわからないけど、ちょっと心配な所もあるので支援してもらえば助かるから……と思ってしまう方も多いのではないだろうか。

西濃地域のほとんどの市町でサポートブックは作られ、その名称は様々です。内容も、誕生から乳児期のことを記載する「プロフィール」の部分と、その後のサポートの部分があるというのが一般的でしょう。プロフィールの部分は年月の経過と共に亡心れてしまうことも多いでしょうから、一度記入しておくことで、後々何度も書かなくても済むでしょう。重要なのはサポートの部分です。何歳の頃、どの様な言動があったのか、それに対して、どの様な対応がなされたのかとい

う記述がなければサポートブックとしての意味をなしません。「さができるようになった」という記述をしてほしいわけではないのです。

幼児期、サポートブックを勧められるのは、どの様なお子さんでしょうか。落ち着きがなく、いつも体のどこかが動いている子、人の話を聞いていない子、何かをやっても他の刺激(周囲の音、友だちの動きなど)が気になって自分がやっていることを忘れてその刺激にとんで行ってしまったり、他の人と共感のまなざしや模倣が見られない子、会話が成立せず一方的なおしゃべりに終始する子、不安感がとても強く新しい場や初めての課題、初対面の人に緊張してしまったり、家では話すのに園では話さない子、こだわりやマイルールのある子、興味の限局のある子、自分の思いをうまく表現できない子等々、子ども自身は気づいてはいないかもしれませんが、大人の目から見て困りをもっていると思われる子ども達です。

一方、親さんたちからすると、「まだ小さいから当然でしょう」「僕も小さい時さうだった……」という思いが強く、反発も当然あるのだらうと思います。しかも、これはとても残念なことですが、園の保育者の認識が「サポートブックを持つ子は「障害児」という誤った方向に流れていたり、「個別支援計画

を作るのは大変だから、特別支援学校や支援学級に進む子だけにしよう」といった考え方になっていたりすることもあるように思います。

初心に立ち返れば、サポートブックや途切れのない支援ということ、発達障害者支援法成立に端を築いていきます。知的に発達のゆくりな子どもたちに対してはそれなりに自立の道がつけられてきていましたから、サポートブックはむしろ通常学級で学んでいく子ども達の中で、特に心配りをしてあげるべき子ども達への支援のあり方と考えるべきものでした。

だからこそ、教室環境の整備、ユニバーサルデザインということが大切にされ、人的環境として子どもたちに関わる保育者や教員の言葉の使い方や指示の出し方などにも配慮がなされてきたのだと思います。

そして、サポートブックというものは、単に幼児期のみ、あるいは小学校時代のみ限定的なものではなく、そのお子さんの保護者や家族が今後どのように関わっていくのか、小学校や中学校では、どの様な関わり方や支援が必要なのか、有効な手だてと共に間違った手法をしていかないための指針となるものと考えてもよいでしょう。

今、私の所には日々相談の電話がかかってくる、入院中の身

としては、自由に動くことができないのでアドバイスするしかないのですが、「高校へ行けなくなった」、「学校で友だちに話しかけることができない、話しかけても無視される」等々、自立しない生徒たちの相談も多々あります。よく聞けばサポートブックもあるし、引きつぎ会もしたというのです。過激な発言をしたり行動面で自立つ生徒は先生方に注目してもらえますが、大人しい子、自分さうまく出せない子などは、見すごされていくことが多いのかもしれない。そして保護者の相談を受けていて一番驚くことは「コーディネーター」の存在を知られていないという現実です。サポートブックを持ち、引きつぎ会にも参加した保護者が、入学後どこに相談したら良いのかを知らされないということは何を意味するのでしょうか。サポートブックや引きつぎ会の形骸化であってほしくないと思うのですが……？

支援から自己理解へ……

困りをもつ子どもたちに対する途切れない支援は、その子どもたちが成人した時の自己理解につながるべく、だから大切なことです。不注意のある子どもたちはいくつもの指示を覚えおくことは大変です。だからこそメモを取るという習慣が必要でしょう。成人した時に「ちょっとお待ち下さい。メモらせて下さい」と言えるようになっていくでしょうか。「僕は、いくつも一度におぼ

られると間違ってしまうので……」と、どの様な方法を取ってもうらと助かるのかを自分で話せるでしょうか。分かったふりをして忘れてしまつて大事な用件を相手に伝えられなかったら、そんな人は雇つてはもらえません。「うちの子はくが苦手だけど大きくなれば大丈夫だと思つています」と自信満々の保護者の方や「勉強はまあ出来ませんが……」と大鼓判を捺して下さる先生方、本当に大丈夫ですか。

多くの市町でサポートブックをもつ子どもたちの引きつぎ会が実施されてきましたがこの辺で一度、ふり返りをしてみられたら如何でしょうか。保護者の理解も本人の自己理解もすすんでいるでしょうか。途中で支援が途切れてしまったケースや、今も困っているケースなどはないでしょうか。不登校や引きこもり、ゲーム依存などはないでしょうか。引きついだ後の見届けの部分がおおりにされてはいないでしょうか。幼児期の気づきに始まるサポートブックですが、子どもたちの見届けの不十分さは、後の福祉行政への負担として返ってくるのではないかと気がしています。先を見通す目が必要ですね。

お知らせ

一月の例会は一月十七日(月) 9:30 ~ 11:50
場所はスイトピアセンター 6-1-2 に変更。

